

## 巻頭言

著者	森 一生
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	12
ページ	4-4
発行年	2018-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002735/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002735/</a>

ドイツの心理学者マックス・ピカートは、「一人の人間の中には、到底その一生の間には費いはたすことができないほど多量な『沈黙』が蔵されている。そしてそのことが人間のあらゆる表現に神秘的な色調をあたえるのである。一人一人の人間の内部にある『沈黙』はその人間の生涯をこえる。そしてこの『沈黙』の中で人間は過去、および未来の世代につながっている。」と云う。

また、「沈黙は、愛、真心、死など他の始原的現象を蔽っている。つまり、愛や真心や死のなかには、それらが愛、真心、死として外部に現れるよりも一層多くの沈黙が宿っているのである。」(だから)「もしも言葉に『沈黙』の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまうだろう。」

『：黙って！ あなたの言葉が聞こえるように』——愛の中には言葉よりも多くの『沈黙』がある。——  
 と言う。  
 (『沈黙の世界』マックス・ピカート 佐野利勝訳 みすず書房 一四、一五頁)

心理学の用語に「確認バイアス」と言う言葉があるそうだ。人は誰でも、自分の主張に都合のいい情報、自分が下した判断を後押しするような情報を集めてしまいがちになる。またその逆に、反証となるような事実から目を背けたり、あるいはその収集を怠ったりしてしまう……こういう現象を言うのだそうだ。

現代社会は、この「確認バイアス」を加速させ、自分に『心地好い』情報を(だけを)集め、読み、自分の感性に近い人とだけ交わり、逆に言えば、感性に合わない人・ものを排除し、蔑み、遠ざける……こととなっていくのではなからうか。

……『沈黙』(のもつ多様性)が、あらゆる表現に神秘的な色調をあたえる……演劇のもつ多様性もまたしかりである。